

補中益気湯の古典に 基づいた医学適応と 現代臨床応用について

熊本赤十字病院
総合内科・総合診療科 副部長
加島 雅之 先生

ミディ漢方医院福岡 院長
石東 麻里子 先生

補中益気湯は、金元四大家の一人である李東垣の創方した処方である。現代では、補剤の代表的な処方として位置付けられており、臨床応用されている疾患・症候も幅広い。そこで今回は、補中益気湯の古典に基づいた医学適応と現代における臨床応用について、ミディ漢方医院福岡 院長の石東麻里子先生をお招きし、熊本赤十字病院 総合内科・総合診療科 副部長の加島雅之先生と対談していただいた。

I 李東垣が考案した 補中益気湯の方意

加島 補中益気湯は出典が李東垣の「内外傷弁惑論」、「脾胃論」で、効能は益気昇陽、甘温除大熱、益気健脾です。補中益気湯の応用範囲は非常に広く、江戸時代最大のベストセラーとして知られた医学書である古今方彙(甲賀通元)では全280病門(1,894処方)中、最多の72病門(89回)に登場します。

組成は、原典では「黄耆1錢~5分(3.7~1.85g)、甘草5分(1.85g)、人參3分(1.11g)、白朮3分、升麻3分、柴胡3分、当歸3分、上記を挽いて1回分として1/2に煎じて飲む」とされていますが、現在のエキス製剤の組成と比較すると、特に甘草の分量が大きく異なります。

補中益気湯は「益気健脾」の処方として知られていますが、益気健脾においては「脾気虚」と「痰湿困脾」という表裏一体の二つを同時に治療する必要が多くなります。そこで、補中益気湯の処方構成を「益気健脾」の方剤の組み立てから考えてみましょう。益気健脾の基本薬対である白朮と茯苓に脾胃を守る3人組(大棗+生姜、甘草)と人參を加えることで完成する四君子湯に、和胃化痰の半夏と陳皮を加えると六君子湯になります。補中益気湯はさらに升麻・柴

胡、黄耆、当歸、陳皮を加え、一方でkey drugである茯苓が外されています(図1)。ですから補中益気湯は、単なる益気健脾の処方とは異なる意図が強く作用して創方された処方ではないかと思えます。補中益気湯を胃腸薬として用いたい場合、エキス製剤だと六君子湯や平胃散を合方するなど、他の処方と合方したほうがよいように感じます。

石東 同感です。二陳湯を加えることもあります。他にどのような病態に補中益気湯をお使いになりますか。

加島 中気下陷によって起こる慢性下痢症や、立ちくらみに、下がった気を持ち上げる処方として補中益気湯を用い

図1 「益気健脾」の方剤の組み立て



ます。また、脾胃が弱いために起こる肝気横逆に対して、脾胃の立て直しからの治療が必要な際にも補中益気湯を用います。

石束 補中益気湯の服用によって逆に「体がしんどくなった」とおっしゃる患者さんに、四君子湯や六君子湯で守胃させると落ち着かれます。

「方意弁義(岡本一抱)」巻之四・補中益気湯に、補中益気湯と四君子湯・六君子湯の使い分けについて記されていますが(図2)、補中益気湯との使い分けについてどのようにお考えですか。

加島 四君子湯、六君子湯は胃腸薬ですが、一方で補中益気湯は胃腸薬としては茯苓が除かれていることがもの足りませんし、柴胡・升麻が加味されることで本当に胃腸が虚弱の方には使いにくいところがあります。しかし、ストレスが絡むような病態には、とくに柴胡が加味されていることで疏肝の意味合いも出てきます。また、六君子湯や四君子湯ではもたれるという方は、補中益気湯の方が飲みやすいです。

石束 和田東郭は“軽けれどきぶからず、むっくりとしてべったりともせず軽重の中間に位する味わい”と述べていますね。また、逍遙散を小柴胡湯の変方とし、疏肝剤としての補中益気湯の位置づけも興味深いです(図3)。

加島 北山友松子は、病気治療後の体力回復に六君子湯・四君子湯ではもたれるため、補中益気湯を用いていましたし、さらに肝旺を抑えたいときには当帰を除いて芍薬に替えています。

図2 「方意弁義(岡本一抱)」巻之四・補中益気湯

「……薛己が謂う所の軽き時は益気湯、重き時は六君子湯と伝える……是れは胃の元陽甚だ衰えて、虚陽・虚火取り升りて応ぜざるものなり。

故に四君子湯或いは六君子湯を用いて中焦に元気を充たしめ、虚火収まりて後、再び益気湯を用いて宜し。此の火は東垣の謂う所の火と元気と両つながら立たずと云える。不足よりして燃え出づる火なり。故に四君子湯、六君子湯を以って中焦に元気を持たしむれば、虚火自ずからおさまる。其の所へ益気湯を用ゆれば、宜しく升提をなすなり」

図3 逍遙散の運用

【蕉窓方意解】(江戸・和田東郭)

「これは小柴胡湯の変方だが、小柴胡湯よりは少し肝虚の形があるもので、補中益気湯よりは一層手前の障害に用いる薬と心得るべきである。一層手前とは補中益気湯ほどに胃中の気は薄くないため、人参・黄耆を用いず、その腹形は心下痞鞭し、両脇もまた拘攣して、小柴胡の黄芩・半夏の組み合わせを用いるのは鋭いため、受けにくいため少し和らげせ当帰・芍薬・柴胡・甘草の4味で心下両脇をゆっくと緩めて薄荷で胸膈胃口を開き白朮・茯苓で胃中の水飲を下の水道へ導く意である。」

補中益気湯の益気昇陽を考える上で典型的な症例をご紹介します(図4)。パーキンソン病で加療中の患者さんで、主訴は頻回の転倒と下痢です。脾気虚があり、脈診では両脈が虚していますが、特に尺脈に比べて寸脈が弱いという中気下陥の特徴を呈していたので補中益気湯を処方し、著効が得られました。

補中益気湯は起立性調節性障害にも用いられますが、石束先生は補中益気湯と苓桂朮甘湯をどのように使い分けられますか。

石束 津田玄仙の百方口訣集に補中益気湯を用いる指標として「雑病八証」が書かれています(図5)。その中に「臍動気」の記載があり、苓桂朮甘湯も同所見があるため腹診での鑑別は難しいですが、病態が異なります。苓桂朮甘湯は腎の水飲による気の上衝を治す場合に用い、茯苓・桂枝・甘草で水気を下げます。一方、補中益気湯は中気下陥を治す場合に用い、茯苓が入らず、黄耆・柴胡・升麻によって気を上げます。また、脈診でも鑑別できると思います。苓桂朮甘湯を使いたい場合は滑脈か、痰飲が滞ってしまった場合は濡(澁)脈を呈してきますが、補中益気湯は右寸が浮軟按じて無力か、沈細微のどちらかを指標にしています。

加島 簡単な鑑別として、“立ち上がってすぐにクラっとする”は補中益気湯、“立っているうちにクラッと”は

図4 症例1 77歳女性

【主訴】

頻回の転倒、下痢

【現病歴】

4年前よりパーキンソン病で加療中。2年前より頻回の転倒がみられていたが、この1年は1日3回程度転倒するようになった。また3カ月前より下痢がほぼ毎日持続。

【現症・弁証】

倦怠感あり、力が入りにくい、食欲もあまりわからない、息切れあり、体は冷える。脈：両側虚(寸脈<尺脈)。舌：やや淡 苔薄白。

弁証：中気下陥

治法：益気昇陽

【処方】

補中益気湯エキス7.5g分2

【経過】

内服開始2週間ほどで下痢の頻度が低下し、3日に1回程度となった。転倒の頻度も減少し、さらに約4週間で転倒は2~3週間に1回程度に改善した。

図5 「百方口訣集」(江戸・津田玄仙)の指摘

- 語言輕微
 - 眼精無力
 - 脈散・大・無力
 - 手足倦怠
 - 食に滋味を失す
 - 口に熱湯を好む
 - 口中に白沫
 - 臍に動気
- } 気虚
- } 脾胃虚
- } 腎虚水犯土

苓桂朮甘湯、が目安になります。

石東 補中益気湯の組成でもう一つ注目する点は当帰を入れていることです。気を上げるだけなら昇陷湯(黄耆・知母・柴胡・升麻・桔梗)のような処方でのよいのですが、経過の長い患者さんには補血することに意味があると思います。

加島 実際に慢性疾患に用いる際には当帰を入れないと経過中に効きが悪くなるということがあります。李東垣は当帰を入れることの理由をきちんと述べていませんが、おそらく気だけを動かすと空回りになってしまうために、血を動かした方がよいと考えたのだらうと思います。

補中益気湯のもう一つの効能である「甘温除大熱」について、「気虚発熱」には中気下陷があつて、気がうまく発散できずに化熱するという鬱熱説や、陰虚説、気虚外感説など諸説があります。

石東 李東垣は中気下陷という用語を用いているのですか。

加島 「中気昇らず」という表現が出てきます。「大気下陷」がその後の清代に張錫純によって作られ、大気の下陷で胸に病位があり昇陷湯を用いると医学衷中参西録に示されています。

石東 大気下陷の主症状は気喘(呼吸困難)です。息が吸いづらく、右寸脈が沈細微であればまず昇陷湯を用いて、その後に補中益気湯をエキス剤で用いる、ということは臨床でよくします。

加島 昇陷湯は、大気の供給を考えずに気を上に上げるといふ眼前に起こっていることだけを治療します。しかし、肺そのものを補うことはかなり難しいので、補中益気湯は脾胃を立て直すという後方戦略まで考えられた処方です。

石東 気虚発熱の諸説の中の鬱熱説は李東垣の陰火説に近く、下に滞った気が化熱するというのでよいのでしょうか。

加島 諸説ありますが、誰も李東垣が述べたことをきちんと説明していません。私も、内外傷弁惑論や脾胃論を読み始めた当初はまったく理解できませんでしたが、張元素や王好古の書物を読むことで李東垣が何を言いたかったかが理解できるようになり、さらに李東垣が述べている陰火説に結び付けました。

II 李東垣の陰火説と補中益気湯

加島 脾胃論に記されている陰火説の部分のを和訳してみました(図6)。この文章は、①に前提条件、②と③に結論というように、①から③の現象が連続して起こると述べています。しかも、脾胃の問題がなぜ心の問題につながるかを、その後の文章で解説しています。

もともと、相火論の概念は、体内には心に宿り人体を主宰する「君火」(君主の火)と、腎に源を発して全身に流通する「相火」(宰相の火)が存在し、相火は君火に支配されているのですが、君主の具合が悪くなると制御できなくなり体内を破壊する、という考え方です。

相火論は現代医学に照らしても非常に当を得ています。人体の正常な体温は、70%は心臓で、30%は代謝や炎症、肝臓や腎臓およびその他の組織で作られます。つまり、心臓で作られる生理的な熱と、腎・副腎に宿って全身の代謝や炎症によって引き起こされる、邪になりうる熱で構成されます。これは現代医学的にサイトカインの問題を論じている話と直結します。

石東 漢方薬が有効な疾患に、感染症や自己免疫疾患のようにサイトカイン群の異常を引き起こす病態が多いということに繋がりますね。

加島 私は相火論をサイトカインの問題に対する古典医学的なアプローチの歴史と捉えています。内外傷弁惑論では、腎に脾胃の湿気が下流すると、閉塞させて陰火が上衝し強力な熱が生まれる、とあります。脾胃の気が虚して、そこにあった湿が下に行つて相火を圧迫すると、その相火が爆発するという事です。李東垣は相火が暴走した状況を陰火と表現しています。陰火は、当時一般的に使われていた言葉で、「地熱、水中発光」という意味だと篠原明德先生(明德漢方内科、京都)が明らかにしてくださいました。そして、このような病態解析から治療法としての補中益気湯が考案された、ということです。さらに、相火論を理解すると、補中益気湯の立方本旨も理解しやすいように思いますし、基本加減も理解できます(図7:次頁参照)。

図6 検証:李東垣の陰火説





現代における補中益気湯の 臨床応用

補中益気湯と他の処方との併用

石束 補中益気湯は様々な病態に広く用いられています
が、六味丸や八味丸などの地黄剤との併用は多いですね。
李東垣自身も加減方で臍下痛に熟地黄を使っています。

加島 医方口訣集(長沢道寿)に、「夕方から発熱、尿が出
し渋る、大便が乾燥し便秘、舌に裂紋が走り口が乾き、自
汗・寝汗が出るのは陰血の不足で、補中益気湯に八味丸や
地黄丸料を併用する」との記載があります。牛山方考(香月
牛山)にも補中益気湯と六味丸との併用に関する記載があ
ります。また、先ほどご紹介いただいた百方口訣集(津田
玄仙)の雑病八証の「口中生白沫」、「臍動気」からも脾胃に
障害がおこることによって腎も異常をきたしていると解
釈できますので、腎の治療も必要である、ということにな
ります。

石束 甘温除大熱の方意にて補中益気湯の基本加減につ
いて、葛根、黄柏、地黄、朱砂安神丸を挙げられましたが
(図7)、補中益気湯と組み合わせることでより効果的な処
方として、たとえば気を上げる作用をさらに高めたいとき
に升麻葛根湯との併用はいかがですか。

加島 升麻葛根湯もよいと思いますし、桔梗湯を用いるこ
ともあります。

石束 滋陰降火湯はどのようにお考えになりますか。

加島 滋陰降火湯と補中益気湯の組み合わせは、非常に

弱った女性の更年期症候群に用います。補気しつつ、陰虚
火旺で上に昇ってしまう症候が出る人たちに使い、ただ単
に六君子湯、四君子湯だけではなく、気を正しく昇らせな
がら間違った上衝は下げるといような治療をすると上
手くいくことが多いです。気管支拡張症や非結核性抗酸菌
症、COPDなどの呼吸器疾患に有効です。

石束 陰虚の病態になりやすい疾患ですね。

加島 COPDの患者さんは、気虚だけでなく気分障害を合
併することが多く、ちょっとしたことで過剰に反応する方
が多いですから、気を補い上に持ち上げながら、滋陰降火湯
で補陰しながら過剰な熱を下すということがありますね。

皮膚症状に対する補中益気湯の内托

加島 SLEやベーチェット病の治療には、補中益気湯合温
清飲を用いますし、温清飲加減ということであれば、皮膚
症状などが出ている場合は荊芥連翹湯を合わせます。

石束 補中益気湯は、皮膚疾患で正常な皮膚が回復しにく
いときなど、皮膚症状の改善にも応用されます。

加島 皮膚の脆弱性で褥瘡や肉芽が上がりにくいお年寄
りに補中益気湯を用いると肉芽が上がってきたり、さらに

図7 “甘温除大熱法”



図8 症例2 43歳女性

【主 訴】
ベーチェット病疑いの皮膚症状

【現病歴】
X-2年頃から胃痛、全身の湿疹、毛囊炎様皮疹、40度近くの
高熱、唇が腫れ上がるなどの症状が出現。大学病院皮膚科で「ベー
チェット病疑い」にて半年間プレドニゾン5~20mgを内服す
るも改善せず。X-1年12月より近医にて十味敗毒湯+温清飲+
薏苡仁を内服。X年4月に当院に紹介受診となる。

【現 症】
爪と陰部に潰瘍所見

【処 方】
四妙勇安湯加黄耆

【経 過】
潰瘍は改善傾向にあったが、X年6月に右足の痛み、発熱、下肢湿
疹にて大学病院を再受診。検査所見より「シェーグレン症候群疑
い」と診断。漢方薬は一旦休業したが湿疹が治らないため、同年
10月に治療再開を希望され来院。

【X年10月の現症】
毛囊炎様皮疹が下肢に散在。月経の前後で増悪。
脈診: 六部とも沈細濡。舌診: 小、紅舌、苔少。腹診: 胸脇苦満。
その他: 公孫の虚汗、鼻翼周辺の発赤。

【弁 証】
中気下陷兼腎陰虚

【論 治】
益氣昇陽、補腎陰

【処 方】
補中益気湯エキス5g、六味丸エキス5g、四物湯エキス6錠

【経 過】
X+1年12月には、皮膚症状はたまに出現しても軽度。漢方減量
にて経過観察中。

黄連解毒湯などを加えると化膿が治まって皮膚症状が軽快します。これは「内托法」といって、気虚のために排膿されなかつたり肉芽が上がらないときに用いる方法であり、黄耆が主薬とされています。

石束 中国で、糖尿病性壊疽に黄耆の大量投与で奏効するお話を伺ったことがあります。皮膚症状の改善に補中益気湯が有効であった症例をご紹介します(図8)。

この症例は、不明熱を気虚発熱と捉え、中気下陷に腎陰虚を考慮して、補中益気湯、六味丸にさらに両剤の作用を高めるために四物湯の錠剤を処方しました。その後約1年間継続しましたが、皮膚潰瘍や下肢湿疹症状は出ても軽度で、その間の熱発もありませんでした。

加島 非常に素晴らしい症例です。この症例は脾胃の問題で、鼻翼の発赤などは脾胃の異常によって虚熱が上に上がつているという状況であり、腎も一緒に障害をきたしています。四物湯の錠剤を加えられていますが、それはなぜですか。

石束 月経に関係して増悪しているため補陰血させる当帰と地黄の量を増やしたかったからです。

加島 私はベーチェット病の患者さんには補中益気湯合温清飲を用いることが比較的多いですが、この症例では直接的に清熱せずに見事に虚熱が除かれています。そこはやはり補中益気湯なのだろうと思います。

IV 補中益気湯の使用時のポイントと注意点

加島 補中益気湯を処方する際の身体的なポイントは、「気が上に昇らない」だと思います。先ほども述べたように、立ち上がるとすぐにふらつく、右の寸脈が弱い、という点です。また、気虚に対するエキス製剤があまりないので、短期間で気を補いたいときに補中益気湯は有用です。

石束 現代のエキス製剤の補中益気湯は補気血作用が増強され、李東垣の創方当初の内容とは異なります。

加島 創方した時の補中益気湯は、李東垣は内傷といっていますが李東垣自身が認めているように大流行したことを考えると明らかに感染症であり、体力が虚損したことによって起こってきた感染症病型に対する治療薬でした。つまり、強力な邪の侵襲に対して生体が上手く反応できないために起こる感染症の治療薬として開発されたのです。一方で、より慢性的な疾患群や気を補うことをメインにしたいようなときには甘草を減らした方が効きは良いですし、甘草の副作用を考慮して現在の形になったと考えられます。

江戸時代の口訣では非常に虚弱な方の感染症の治療に、まず補中益気湯を用いてから麻黄湯など次の治療という選択肢もあるとの記載も見られます。

石束 甘温除大熱法の考えによれば、心火を瀉すために甘草を入れています。これをもっと臨床応用したいと思います。

加島 グリチルリチンが非特異的にさまざまなウイルスに効くのではないかという報告がありますので、ある種の抗ウイルス薬としての位置づけも今後考える必要があります。また体が弱っている人たち、身体が弱るがゆえに過剰な生体反応として、高熱や過剰な動悸が出ることがありますが、それらに対して人參、黄耆、甘草が抑える効果を期待できるかもしれません。補中益気湯はバランスの良い、補いすぎない、補ったときに起こる副作用まで考慮して作られている処方なので、広く臨床応用が可能です。

石束 加島先生に、補中益気湯を理解する上で要となる、李東垣の陰火説を紐解いていただき、より理解が深まりました。

加島 私も石束先生とのお話から改めて補中益気湯を理解できたように思います。本日はありがとうございました。



加島 雅之 先生

2002年 宮崎医科大学 医学部
(現:宮崎大学医学部) 卒業
同 年 熊本大学医学部 総合診療部 入局
2004年 沖縄県立中部病院 総合内科 国内留学
2005年より熊本赤十字病院 内科
2006年 亀田総合病院 感染症科 国内留学
2013年より 現職
2014年 総合診療科 兼務



石束 麻里子 先生

2005年 久留米大学医学部卒業 同附属病院・九州労災病院にて臨床研修
2007年 木村クリニック勤務
2010年 江部医院・高雄病院本院・京都駅前診療所に勤務
2012年 ミディ漢方医院福岡 開院